二〇一八年一一月一六日

路地小春ごみ出しに出て立ち話　満天
新米で作る奉納団子かな　明日香
路地に洩る湯けむり甘き寒造　智恵子
七五三草履脱ぎすて歩きだす　さつき
岩陰に身を寄せ会ひて番鴨　うつぎ
池の面に錦あやなす散紅葉　やよい

二〇一八年一一月一五日

白無垢を寿ぐ紅葉あかりかな　さつき
手入れ終へたる松の秀に風わたる　さつき
朝霜の車体に指で落書きす　明日香

二〇一八年一一月一四日

賑ひて木の葉しぐれのカフェテラス　はく子
目瞑りて木の葉しぐれに佇みぬ　たか子
ガイド本読みつつ足湯旅小春　さつき

二〇一八年一一月一三日

石蕗の黄が一隅照らす屋敷神　よう子
我が影へ鯉の寄りくる小春かな　満天
錦絵のごと展けたる紅葉山　明日香
読み返す母からの文冬ぬくし　菜々

二〇一八年一一月一二日

撫で牛の耳こちょこちょと七五三　なつき
絵馬堂に銘酒並びし菊日和　さつき
山霧の消えて湯煙たちのぼる　なつき
玉のごとき小春日和を授かりし　ともえ

二〇一八年一一月一一日

嶺に佇てば眼下時雨るる村灯り　愛正
残照の空の高みに匕首の月　せいじ
七五三侍者のごとくにカメラマン　宏虎

二〇一八年一一月一〇日

開きたる句帳に触れて銀杏散る　更紗

球児らの鋭声小春の河川敷　菜々

毎日句会みのる選・二〇一八年一一月一八日